東京大学 文書館ニュース

The University of Tokyo Archives Newsletter

vol. 61, Sep. 2018

～ ある新人職員の探検：東大文書館への道 ～

文書館（本郷）は医学部１号館（昭和６年建築）を入って右に道なりに進み…

➡

⬇ 事務室は階段手前の S109 ！

⬆ まっすぐ進み、２つ目の通路を左にまがると、閲覧室！

⬇ 事務室の先の階段を上がり２階へ

⬅

Contents

2　ご挨拶
大沢　真理

2　東京大学文書館デジタル・アーカイブの公開
宮本　隆史

5　その名は、奉遷箱
森本　祥子

6　資料の公開について

7　業務日誌（抄）
（2018年2月～2018年7月）

8　文書館トピックス
東京大学文書館へGO！
上田　真弓

柏キャンパス一般公開

今年は東大紛争から50年！
当時の詳細な記録を紹介します。

日程：2018年10月26日-27日
場所：東京大学柏キャンパス

～ご来場お待ちしております～

東京大学文書館
The University of Tokyo Archives

ご挨拶

東京大学文書館長　大沢　真理

2018年4月から文書館長を務めている大沢真理です。3月いっぱいまでの3年間は社会科学研究所の所長を務めました。研究者として専門にしているのは、社会政策の比較ジェンダー分析です。

前任の羽田正理事・副学長が館長を2年務められたあとを、はからずも引き継ぐことになりました。それまで東京大学に文書館があることは知っていても、どの場所にどのような形態で存在するのか知らなかった、という状態からの出発でした。

これは、私がとくにぼんやりしていたためというより、文書館の直接の関係者を除く多くの本学構成員の状態ではないかと想像します。公文書等の管理に関する法律が施行されたのが2011年、東京大学文書館が設置されたのが2014年、その文書館が公文書管理法に基づく国立公文書館等に指定されたのが2015年。まだまだ発足間もない組織です。館長の任務は、羽田前館長が本ニュース57号掲載ご挨拶に列記されていることが、そのまま持ちこされています。

この間、文書館本館（医学部1号館）と柏分館（総合研究棟）の状態を確認し、また全国公文書館長会議の前段として竹橋の国立公文書館を見学し、直近では京都大学の大学文書館を見学させていただきました。

京都大学大学文書館HPおよび訪問の際のご説明によれば、同館は2000年11月に設置されており、本格的な大学文書館として日本で初めてのケースです。その設置の契機の一つは、情報公開法が2001年度から施行されたことだとされます。情報公開法には、行政文書の厳密な管理と国民からの開示請求への対応などが規定されていますが、京都大学では、保存期間が満了となった文書（非現用文書）の管理・公開もおこなう必要があるとの見地から、「大学公文書館」の設置に動いたそうです。同館が設置されたもう一つの契機は、『京都大学百年史』の刊行が2001年3月に終了したことだとされています。

ひるがえって本学では、1987年に『東京大学百年史』の刊行を終了しており、その編纂のために収集された膨大な資史料を管轄するためにも、同年に東京大学史史料室が設置されました。14年後、情報公開法が施行された2001年には、大学史史料室の既存文書や以後に収蔵する文書に情報公開制度が関わりうることから、公文書館を設置しよう、という発想には、おそらく至らなかったのでしょう。さらに13年が経過して2014年に、ようやく当文書館が設置されたわけです。

こうした経緯もあり、当文書館にはハード・ソフトのあらゆる面で、課題が山積していると痛感しています。しかし、決して恵まれているとはいえない環境のなかで、豊かな能力・識見を兼備した専任教職員が、高いモチベーションで業務を担っています。財務省における公的な文書の隠匿や改ざんが問題になったことを契機に、公文書の管理と公開に対する一般の関心は、かつてなく鋭くなっています。また本学創立150周年（2027年）まで10年を切った現時点で、大学史への学内外の関心も高まっています。当文書館の最大の強みである人材が遺憾なく能力を発揮できるよう、館長として微力を尽くし、課題が解決されていくことを期待しています。

（おおさわ　まり）

東京大学文書館デジタル・アーカイブの公開

東京大学文書館特任助教　宮本　隆史

東京大学文書館は、デジタル・アーカイブを2018年8月に本公開した（http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/UTArchives/uta/s/da/）。東京大学文書館のデジタル・アーカイブ部門では、東京大学が保有する特定歴史公文書等・歴史資料等に関する情報を持続的にウェブ上で公開するためのデジタル・アーカイブの開発を2016年に開始し、2017年にはベータ版を公開して本年の本公開につなげた。本稿では、本公開にいたるまでの経過を記録したうえで、本公開版デジタル・アーカイブの紹介を行なう。

本公開にいたるまでの経過

2017年10月にベータ版システムが公開されるまでのあいだ、東京大学文書館はHTMLとPDFの静的データとして、目録情報をウェブ上に公開していた。そのため、検索をはじめ効率的な活用のための手段を提供できずにいた。集中的にデジタル化が進められた明治期分の『文部省往復』（S0001）をはじめ、東京大学文書館がオンライン公開すべきデジタル画像データ数は増えており、デジタル・アーカイブのシステム開発が大きな課題となっていた。

デジタル資産の公開のための仕組みを必要としていたのは、東京大学内でも文書館だけではなかった。同様の

課題を抱えていた、総合図書館や大学院情報学環の助教レベルを中心とした研究者が、研究会を通じて国内外における状況の調査、技術的な方法論、利活用の可能性について議論をおこなっていた[1]。この議論の一環として、セマンティック・ウェブ技術を用いた、比較的高機能なデジタル・アーカイブの可能性を考察していた[2]。これによって、文書館の資料のコンテクスト情報を十分に記述し、それを活用した分析手段を提供する可能性を模索した[3]。

しかし、東京大学文書館にとっては、こうした利活用の可能性を重視して高機能のシステムを構築するアプローチと並んで、限られた予算と資源においていかに持続可能なシステムを維持するかがより重要な課題であった。この背景として、継続的な運用が困難になり停止せざるを得なくなった先行のデジタル・アーカイブが少なくないという問題があった[4]。これに対処するためには、システム環境の維持、システムの継続的開発、多機能システムの維持、技術変化への継続的対応といった課題を解決する必要がある[5]。さらに具体的には、ハードウェアのメンテナンス、オペレーティング･システムの管理、セキュリティ対策などにかかる費用を抑えなければならないという課題もあった。現実的な解決策として、東京大学の情報基盤センターが提供するレンタル・サーバのサービスを利用することとした。このサービスで提供されるアプリケーション実行環境は、いわゆるLAMP（Linux, Apache, MySQL, PHP）環境であり、この上で運用できる軽量のシステムを模索することになった。

すべてを独自のシステムとして開発（スクラッチ開発）すると、開発費用を支払えなくなったときにデジタル・アーカイブを公開しつづけられなくなってしまうおそれがある。そのため、すでに安定的なコミュニティが形成されているオープンソースのソフトウェアで、オンライン展示用システムとして定評のあるOmeka（https://omeka.org/）を採用することになった。Omekaは、ジョージ・メイスン大学のロイ・ローゼンツヴァイク歴史ニューメディア研究所が中心となって開発する、軽量のコンテント･マネジメント･システム（CMS）で、機能拡張のための追加のプログラム（プラグイン）がさかんに開発されている。東京大学文書館デジタル・アーカイブのベータ版の開発においては、目録情報の管理にこのOmekaを利用し、閲覧者用のユーザ･インターフェイスには開発スピードを重視してWordPress（https://wordpress.org/）を使った。東京大学文書館のアーキビストの知見をもとにした、最適な閲覧者画面の設計を行なうべく議論を重ね、実際の開発は東京大学情報基盤センターの中村覚氏の協力を得て進めた。こうして実現したのが、2017年10月のデジタル・アーカイブのベータ版システムである[6]。

ベータ版システムの公開後、ただちに本公開版の開発に移った[7]。本公開版の開発は、2017年度からはじまった、東京大学デジタルアーカイブズ構築事業の枠組みによって進めることが可能になったものである。また、2017年11月には、Omekaの大きな仕様変更の発表があった。従来のOmekaをOmeka Calssic（https://omeka.org/classic/）と改称したうえで、組織向けのシステムとしてOmeka S（https://omeka.org/s/）が正式に公開された。Omeka Sは正式公開されてからまだ時間がたっていなかったが、周辺の拡張機能の開発などが迅速に進められていた。そのため、東京大学文書館デジタル・アーカイブの本公開版では、このOmeka Sを採用することとした。ベータ版の開発で主に行なったのは、閲覧者用のユーザ・インターフェイスの開発であったが、これに対する閲覧者からの反応を受けて、さらに必要な基本機能が明らかになった。Omekaに標準で実装されている機能や既存の拡張機能プラグインでは、文書館の持つ資料どうしの階層的な関係を可視化するには十分ではなかった。また、ベータ版では、旧字・異体字などを同時に検索することもできなかった。さらに、国立公文書館など外部のデジタル・アーカイブとの連携も困難であった。また、ベータ版では迅速な開発のため、WordPressを使って閲覧者用ユーザ・インターフェイスを開発したが、本公開にあたってはこれもOmekaのインターフェイス（Omeka Theme）として実装するほうが利点が大きいと判断した。これら必要な機能を、Omekaの拡張機能をプラグインとして、業者に委託し開発することとした。また、外部のシステムがデータを利用しやすいように、目録データは標準的なメタデータの語彙に可能なかぎり準拠したうえで、JSON-LDやRDF/XMLなど複数の形式で取得できるようにしている。

もちろん、デジタル・アーカイブが提供するデータを使って、研究などのために高度な活用をするためには、解決すべき課題が残されている。具体的には、画像の活用の幅を広げるために、IIIF（International Image Interoperability Framework）へ対応することが望ましい。また、メタデータのより広い共有化のためには、LOD（Linked Open Data）化のためRDFストアを構築することが有効であろう[8]。そのうえで、研究・展示を指向したアプリケーション開発を行なうことが容易になる。これらについては、学内他部局のデジタル・アーカイブと連携しつつ実現していくことが現実的であると考えている。

開発したプラグインは、一定の条件下で自由な利用を許諾するオープンなライセンスを付与してウェブ公開する予定である。学内他部局や学外組織も利用できるようにし､外部的な効果を生み出そうとしている。デジタル･アーカイブ事業一般が直面する課題に対するひとつの解決策を打ち出すことは、東京大学文書館の社会貢献のひとつとなると考えている。

東京大学文書館デジタル・アーカイブの機能紹介

デジタル・アーカイブの本公開版の閲覧者用ユーザ・

インターフェイスは、基本的にはベータ版の設計を踏襲したもので、キーワード検索と階層検索の二種類の検索機能を備えている［図 1］。キーワード検索機能には改良を加え、旧字・異体字を同時に検索できるようになっている。旧字・異体字の登録は、管理画面より行なうことができる［図 2］。管理画面では、階層の階層関係を編集できるようになっている［図 3］。また、国立公文書館との横断検索を可能とするため、SRU/SRW への対応を行なった。新デジタル・アーカイブの利用マニュアルはウェブサイト上で公開している（http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/UTArchives/uta/s/da/page/manuals/）。

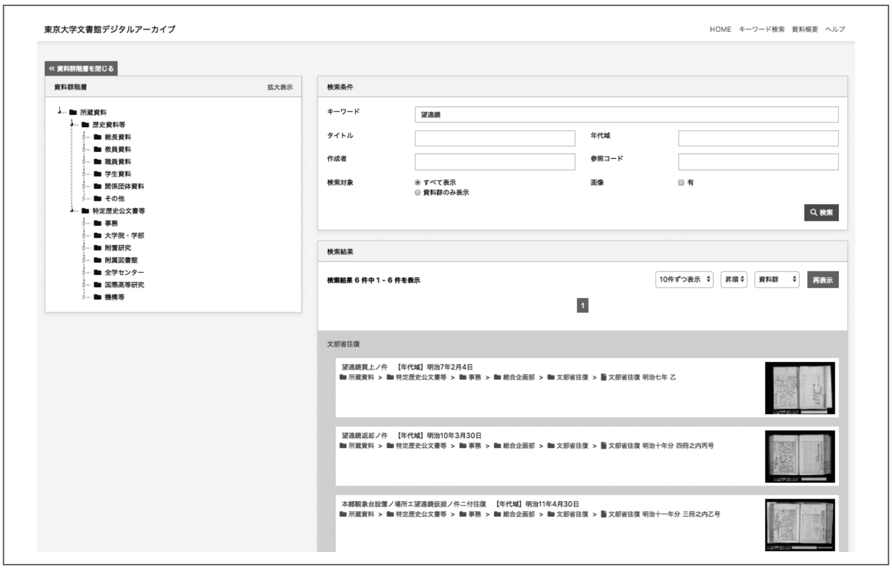

図 1

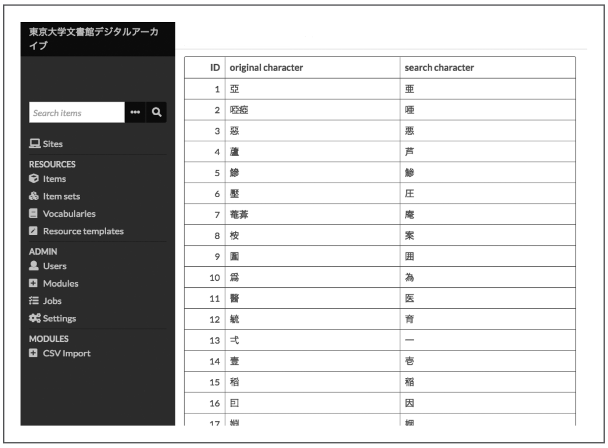

図 2

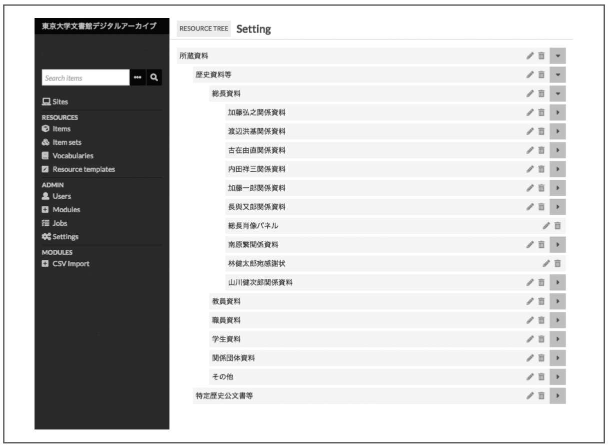

図 3

1 この研究会における議論の成果としてたとえばつぎがある。阿部卓也・加藤諭・木村拓・谷島貫太・冨澤かな・宮本隆史 . 2017.「アジア・環太平洋地域のナショナルデジタルアーカイブ政策 : 文化資源の統合と連携の諸相」.『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』92: 27-68。

2 宮本隆史 . 2016.「大学史関係資料のセマンティック・ウェブ技術による活用に向けて」.『東京大学文書館ニュース』57: 2-4.

3 関連する研究としてつぎを参照。中村覚・稗方和夫・満行泰河・加藤諭・宮本隆史・高嶋朋子 . 2017.「『文部省往復』を中心としたデジタルアーカイブの構築とその活用」.『東京大学文書館紀要』35: 30-43.

4 デジタル・アーカイブの休止と再構築についての事例としてつぎを参照。宮本隆史・中村覚 . 2017.「社会情報研究資料センター『Digital Cultural Heritage』の公開休止に関する考察と再構築」.『東京大学大学院情報学環　社会情報研究資料センターニュース』27: 274-279.

5 宮本隆史 . 2018（予定）.「組織のデジタル・アーカイブ構築の課題と解決に向けた一考察」.『東北大学史料館だより』29.

6 宮本隆史 . 2017.「東京大学文書館の新デジタル・アーカイブの試験公開」.『東京大学文書館ニュース』59: 2-3

7 宮本隆史 . 2017.「東京大学文書館デジタル・アーカイブの本公開に向けて」.『東京大学文書館ニュース』60: 4.

8 注 3 を参照

（みやもと　たかし）

その名は、奉遷箱

東京大学文書館准教授　森本　祥子

当館には、「教育勅語の背負子」と呼びならわしてきた資料がある。要は御真影と教育勅語を入れた金庫に布のカバーをつけて背負って運べるようになっているものである（写真1）。背負って運ぶという不敬な状況を考えると、これが日常的な運搬用のものでなく緊急時の搬出用のものだろうということは容易に想像できるが、いつ大学に備えられたものなのか、なにか名前はあるのか、など、一切わかっていなかった。

ところが、このたびそれに言及している文書がみつかった（「内規及諸規定等」（S0018/SS08/0001））。そこには、非常時に御真影と勅語を納めて運ぶ容器のことが「奉遷箱」と記されている。

写真１　奉遷箱の正面および横の様子

今回、奉遷箱への言及が確認できたのは、昭和18年10月20日付で「御真影等奉護心得」を定め、代わりに昭和16年9月1日付で定められた「防空開始命令アリタル場合ノ御影及勅語ノ奉遷並警護心得」を廃止してよいか、という伺である。伺にはそれぞれの心得が添付されていて見比べることができる。これら両心得のつくりは基本的に同じであり、御真影等の緊急時避難先が図書館第三安全書庫であることや、その搬出から奉安殿に戻すまでの手順や鍵の管理、その他の警護担当者の分担などが詳細に規定されたものとなっている（写真2）。

しかし細かく見ると、ふたつの「心得」には若干の違いもある。昭和16年版心得では、「奉遷ハ総長ノ命ニ依」ると書かれており、搬出の最初の指示は総長が出すことが明記されているが、昭和18年版心得ではその記載がなく、「奉遷ハ庶務課長監督ノ下」に実施するとされている。あるいは、昭和16年版心得では第一の避難先である図書館第三安全書庫が危険になった場合には、懐徳館→柔剣道場→その他安全な場所、と避難先の優先順位を具体的に指定しているが、昭和18年版心得ではこうした具体的規定はなく、「事態急迫シ以上各項ニ依ルコト至難」な場合は庶務課長または庶務課事務官が応急措置を判断することとされている。

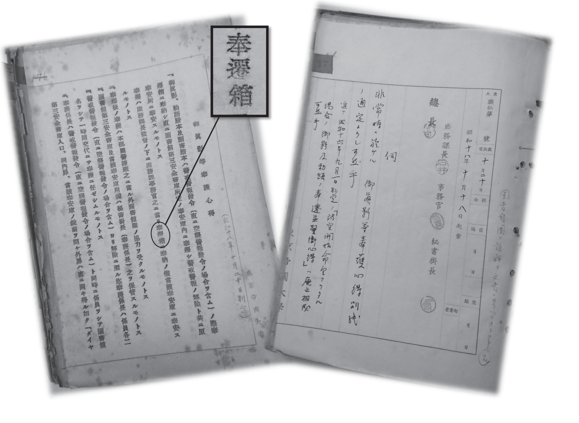

写真２「御真影等奉護心得」制定伺

こうした変化からは、この2年の間に御真影や勅語を避難させる頻度や緊急性が高まっており、悠長に総長の指示を仰いだり決まったとおりの手順を踏んだりしていては間に合わないというような、時代が緊迫してきた様子が浮かび上がってくる。この間に、日本は初めての本土空襲を経験している。じっさい、伺文書の欄外には「最悪ノ場合ニ於ケル奉護場所」として、第一工学部水槽下、あるいは池畔などと鉛筆でメモ書きされており、空襲時の火災が現実味を帯びていたことが窺える。

実はこの心得の文章だけでは、奉遷箱が、中の金庫だけを指すのかカバー付きの背負える状態のもの全体を指すのか、確定できない。個人的には、ほんらい奉遷箱が指すのは金庫部分だけで、カバーは後に作られたのではないかと想像する。というのも、金庫は立派なのだが、カバーはいささか雑な作りに思われるからである。緊急時の持ち出しという準備自体は以前からあって、立派な金庫も作ってあったが、当初は金庫を抱える程度の想定で済んでいたものが、空襲警報発令が頻繁になっていく戦争末期に、より迅速に運ぶ必要性から急遽金庫を背負うためにカバーをあつらえた、と考えられないだろうか。奉遷箱に関する文書がないか、今後もう少し探してみたい。

いずれにせよ、御真影と教育勅語を緊急時に運ぶものを「奉遷箱」と呼ぶ、ということははっきりした。これまで当館ではこの資料の名称を「勅語避難運搬用リュックサック」としていたが、これを機に資料名を改め、「奉遷箱」とする。今後、当館のデジタルアーカイブにこの画像も搭載する予定である。ぜひごらんいただきたい。

（もりもと　さちこ）

資料の公開について
（2018 年 2 月 1 日～ 7 月 31 日）

上記期間内に整理を終え新たに公開した特定歴史公文書等ならびに歴史資料等は、以下のとおりです。
※概要記述とアイテムリスト（目録）は、当館のホームページからご確認いただけます（http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/UTArchives/uta/s/da/）。

特定歴史公文書等

事務

S0032 庶務部委員会関連資料
S0039 資料室（大学改革）
S0048 文部省在外研究員出張関係資料
S0056 博士学位授与者報告書類
S0264 部長会・連絡課長会
S0309 大学広報映像作成
S0310 総長選挙広報
S0311 報道機関対応
S0312 取材・撮影依頼対応
S0313 広報委員会
S0314 ホームページ運用・管理
S0340 産学連携本部運営委員会
S0341 本部棟 1F ロビー展示
S0342 事務長会議
S0343 統括長会議
S0344 安田講堂・山上会館運営
S0346 部局別職員組織状況表
S0347 名誉教授懇談会
S0348 防災対策委員会
S0349 安全管理委員会
S0350 環境安全本部会議
S0351 安全衛生管理室長会議
S0352 八の日会
S0353 土地・施設等取得・譲渡
S0354 御殿下記念館の管理・運営
S0355 定員現員表
S0356 現員簿
S0357 講座及び学科目等の教員定員調
S0358 ハラスメント防止委員会
S0359 五月祭
S0360 死亡叙位・叙勲申請
S0361 総長補佐による人事関係ワーキンググループ
S0362 総長選考（職員組合関係）
S0366 学生団体設立・継続届
S0367 学生部事務引継ファイル
S0368 防火管理規程等綴
S0369 外国学校等卒業学生特別選考
S0370 入試実施委員会
S0371 入試制度検討関係
S0372 入試監理委員会
S0375 入試教科委員会
S0376 後期日程第 2 次学力試験
S0377 入試追跡調査

大学院・学部

S0363 医学部教務委員会

附置研究所

S0321 地震研究所教授会
S0322 地震研究所共同利用実績報告
S0323 地震研究所定員関係
S0324 地震予知研究協議会
S0325 地震研究所紛争関係資料
S0326 測地学審議会
S0327 地球物理専門小委員会
S0374 地震研究所内規類

全学センター

S0364 低温センター規程等綴
S0365 低温センター運営委員会

歴史資料等

総長資料

F0139 南原繁関係資料

教員資料

F0067 田中学関係資料
F0104 栗田寛関係資料
F0131 今井登志喜関係資料
F0199 精神医学教室旧蔵資料
F0227 土壌圏科学研究室旧蔵資料
F0232 高橋信孝関係資料

学生資料

F0032 蝋山長治郎資料
F0063 金田乙弥関係資料
F0064 佐藤彦二郎関係資料
F0068 内田周平関係資料
F0069 菱刈隆永関係資料
F0148 堀俊蔵受講ノート
F0231 高久近信関係資料

その他

F0113 尾崎尚史寄託資料
F0128 床次竹二郎書簡

上記期間中も個人や団体から多数の資料を寄贈いただきました。ありがとうございます。今後も引き続き、東京大学に関係する資料・学内刊行物のご寄贈をお待ちしています。

業務日誌（抄）
（2018年2月～2018年7月）

※(本):於本郷本館、(柏):於柏分館

2月 2日	加湿器クエン酸処置（柏）
2月 5日	佐藤顧問、秋山、有馬朗人元総長へインタビュー（第3回）（武蔵大学）
2月 7日	川口辰郎氏より中小左次関係資料追加受入（本）
2月 8日	柴田親俊氏より写真帖受入（本）
	森本、独法文書管理連絡会議出席（三田共用会議所）
2月13日	宮本、学術資産アーカイブ化推進室主催セミナーで報告
2月15日	収蔵庫清掃・殺虫剤エヤローチ散布（本）
2月16日	佐藤顧問、秋山、有馬朗人元総長へインタビュー（第4回）（武蔵大学）
2月20日	佐藤顧問、森本、秋山、百五十年史編纂準備WG出席
2月22日	文書館教員打ち合わせ（本）
2月26日	佐藤顧問、秋山、有馬朗人元総長へインタビュー（第5回）（武蔵大学）
2月27日	第40回館員打ち合わせ（柏）
2月28日	森本、近現代建築資料館DB有識者会議出席（国立近現代建築資料館）
	宮本、2/28～3/1　東北大学史料館アーカイブズセミナー講演及びアーカイブズ施設視察
3月 6日	森本、宮本、村上、東大記者会室備付刊行物収集（山上会館）
3月12日	佐藤顧問、秋山、有馬朗人元総長へインタビュー（第6回）（武蔵大学）
	収蔵庫清掃・殺虫剤エヤローチ散布（本）
3月16日	佐藤顧問、秋山、有馬朗人元総長へインタビュー（第7回）（文書館顧問室）
3月20日	環境整備チーム、620号室配架作業（柏）
3月22日	『東大病院だより』バックナンバー寄贈（病院PRCより）
3月23日	秋山、オーストラリア国立公文書館所蔵日系企業記録受入準備委員会出席（国立公文書館）
3月26日	671号室暗幕設置（柏）
3月27日	第41回館員打ち合わせ（本）
3月29日	佐藤顧問、秋山、有馬朗人元総長へインタビュー（第8回）（武蔵大学）
3月31日	羽田正館長退任
	小川智瑞恵教務補佐員退職
	『東京大学史紀要』第36号、『東京大学文書館ニュース』60号刊行
4月 1日	大沢真理館長着任
	学術支援職員設置
4月 4日	宮本、秋山、村上、総合図書館内覧会見学（本）
4月 6日	森本、国立公文書館対談・展示観覧会出席（国立公文書館）
	佐藤信氏、鈴木淳氏より資料寄贈（本）
	藤吉次郎氏より藤吉日出男関係資料受入（本）
	秋山、平成30年度新任教職員研修参加
4月 9日	工学系研究科見学（30名程度）（本）
	里見朋香理事視察（本）
4月13日	収蔵庫清掃・殺虫剤エヤローチ散布（本）
4月16日	佐藤顧問、秋山、有馬朗人元総長へインタビュー（第9回）（武蔵大学）
4月23日	里見朋香理事視察（柏）
4月24日	第42回館員打ち合わせ（柏）
4月25日	宮本、情報学環「デジタルアーカイブ原論」で講義
4月27日	佐藤顧問、秋山、有馬朗人元総長へインタビュー（第10回）（武蔵大学）
	ドアクローザー（609号室出入口2か所）設置工事（柏）
5月 1日	星野厚子学術支援職員着任
	森本、星野、村上、東京大学出版会と打ち合わせ（本）
5月14日	収蔵庫清掃・殺虫剤エヤローチ散布（本）
	環境整備チームによる書架清掃（柏）
5月16日	大沢館長視察（柏）
5月17日	大沢館長視察（本）
5月18日	空調24時間稼働開始（柏）
5月23日	森本、関東弁護士会連合会勉強会報告（東京弁護士会館）
5月29日	第43回館員打ち合わせ（本）
	大沢館長、佐藤顧問、森本、秋山、百五十年史編纂準備WG出席
5月31日	白川栄美学術支援職員退職
	森本、秋山、大学史資料協議会東日本部会出席（國學院大学）
	秋山、柏一般公開会議出席
	除湿機稼働開始（柏）
6月 1日	当分の間、柏分館の閲覧時間を午後のみに変更
	環境整備チーム、除湿機排水作業開始（柏）
6月 5日	収蔵庫（SC105）空調24時間稼働開始（本）
6月 6日	森本、秋山、駒場寮同窓会資料受入れ打ち合わせ（柏）
6月 7日	6/7～6/8　大沢館長（6/7）、森本、宮本、秋山、全国公文書館長会議出席
6月11日	収蔵庫（S110）空調24時間稼働開始（本）
6月14日	森本、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会総会出席（岡山県立記録資料館）
	小根山、6/14、15、18　URA研修
	収蔵庫清掃・殺虫剤エヤローチ散布（本）
6月22日	埋蔵文化財調査室より寄贈（「向岡記碑」関係文書）（本）
6月25日	情報学環図書室より寄贈（社情研40周年式典写真）（本）
	秋山、国立公文書館展示監修（国立公文書館）
6月26日	第44回館員打ち合わせ（柏）
6月27日	吉見副館長、森本、秋山、打ち合わせ（本）
	佐藤顧問、秋山、吉川弘之元総長へインタビュー（第1回）（JST）
6月30日	村上こずえ事務補佐員退職
7月 1日	村上こずえ事務員（職域限定職員）着任
7月 2日	秋山、オーストラリア国立公文書館所蔵日系企業記録寄贈式典出席（国立公文書館）
7月 3日	佐藤顧問、秋山、吉川弘之元総長へインタビュー（第2回）（JST）
	津田秀行氏より資料寄贈（本）
7月 4日	森本、秋山、法学部会計係資料調査及び資料寄贈（本）
7月 7日	宮本、AAS in Asia 2018 Conference（Association for Asian Studies、デリー）で研究報告
7月13日	宮本、柏一般公開会議出席
	森本、非常勤出講（学習院大学）
7月17日	経営企画部長、経営戦略課長視察（柏）
	環境整備チームによる書架清掃、620号室配架作業開始（柏）
7月18日	森本、アーカイブズカレッジに出講（国文研）
7月20日	海上技術安全研究所2名見学（本）
7月24日	資料移送（本郷⇔柏）
7月25日	環境整備チームによる書架清掃（柏）
7月26日	森本、ハラスメント予防担当者連絡会議出席
	収蔵庫清掃・殺虫剤エヤローチ散布（本）
	施設部による執務環境測定（柏）
7月30日	コンバット取替（柏）
7月31日	第45回文書館打ち合わせ（本）
	コンバット取替（本）

文　書　館　ト　ピ　ッ　ク　ス

東京大学文書館へ GO ！

東大まちづくり大学院　上田　真弓

東大まちづくり大学院院生（筆者右）

4月のとある平日の夕方、私は緊張した面持ちで医学部１号館の薄暗い廊下を歩いていた。というのも、あの「歴史ある」東京大学文書館様に呼び出しをされたのだ。

始まりは、五月祭の「東大まちづくり大学院で GO !」(以下「まち大で GO !」)の企画会議に遡る。学生から「淡青」誌の「画像でたどる東大140年」で掲載された昔の写真を紹介するのは面白いのではないか、という提案があったのだ。私は諸手を上げて賛成した。

「まち大でＧＯ！」のスポットを確認中

「まち大で GO !」とは、世界中でブームを引き起こした「○ケモン GO !」と同じ仕組みの GPS システムを使い、東大キャンパス内をスマホで探索する実験である。「まち大」は都市計画やまちづくりを学ぶ社会人大学院であり、五月祭で新たな取り組みをすることになったのだ。

写真を使うためには、許諾が必要である。広報課に問い合わせをしたところ、「東京大学文書館様」が担当で、既に連絡を入れたので直接交渉をしてほしいという。それを聞いて私の中で急に緊張感が高まった。

「東京大学文書館の人ってどんな人かなァ…」と想像してみた。

「東大で文書を管理している人なんて、きっとカタブツの人に違いない。何か難癖をつけられるかもしれないけど、実施するためには少しくらい我慢しないと」などと勝手にあれこれ考え、現地に向かった。

東大は古い建物が多い。医学部１号館も昭和のサナトリウムを思い起こさせるような古い作りで、天気も曇りということもありどんよりとした気分になり、同行していた副級長の伊村くんと一緒にまるで叱られにきた学生の気分になってしまった。だからといって引き返すわけにもいかないので、思い切って古びた扉をノックした。すると、想定外の明るい返事がした。扉を開くと、そこには拍子抜けするくらいニコニコした女性が立っていた。私の心配は一気に吹き飛んだ。

五月祭ポストカード「馬術」赤門前

その女性は村上さんで、さらに森本先生をご紹介された。村上さんは、持ちきれないほどの古いファイルをどさっと机の上に置くと「他にもたくさん写真があるのでぜひ見ていってください」とお二人で楽しそうに説明をしてくれた。その時、やっと呼び出された理由を理解した。そしてたちまち、お二人の人柄と古い写真の虜になってしまった。

見せていただいた写真はどれもこれも魅力だった。時代を感じると同時に、曲がりなりにも自分もこの歴史の１ページの隅にいると思うと、何だか誇らしげな気持ちになった。

結局、これらの写真から数枚を選びポストカードにして「まち大で GO !」の参加者に配布した。大変な人気で、参加しない人まで欲しがるほどであった。

今回ご協力いただいた村上様や森本先生はじめ許諾いただいた東京大学文書館様には、この場をお借りして感謝の意をお伝えしたい。こんな楽しい場所があることを、もっと世の中の人は知った方がよいのではないか。そう思い、気が付くとせっせとポストカードを配布しているのであった。

（うえだ　まゆみ）

東京大学文書館ニュース　第61号　　ISSN 0915-3284

発行日：2018年9月30日（年2回発行）
編集・発行：東京大学文書館
〒113-8654　東京都文京区本郷7－3－1
電話：03（5841）2077（直）
http://www.u-tokyo.ac.jp/history/index_j.html

印刷所：松枝印刷株式会社